

明治天皇、狼川を渡る

明治元年(1868)の昼食休みをはじめとし、明治天皇がここ草津宿を通行・宿泊したのは計6回にのぼります。明治天皇の行幸時、道中ではどの様にして迎えられていたのか、その準備の様子的一端を絵図より見ていきたいと思えます。

この絵図は「御東幸ニ付南笠村狼川御仮橋之図」という表題がつけられており、明治元年の東幸時の東海道通行に際し、市内の狼川(南笠東)に架けられた仮の土橋の図面です。図面からは橋脚の構造が分かるほか、橋の長さ8間4尺8寸(この絵図では1間=6尺で採用されているので、約15.4m)や幅1丈8尺(約5.4m)が書き込まれています。また橋の設置に伴い、橋の端と往還筋を結ぶ新道が設けられたことも分かります。『東海道宿村大概帳』(東海道筋の村々の情報が書かれている)や『東海道分間延絵図』(東海道筋と付近の村々を描いた絵図)を見ても橋に関する記載や描写はないうえに、後者には「平常干川」と書かれていることから、この川は普段は水の流れがない天井川であり特別な通行が無い限り、橋が架けられなかったことが分かります。

草津宿本陣に残る「大福帳」(休泊者の利用記録)に行幸時の下見についての記載が散見されることから、今後これらと併せて検証することで、より詳細な行幸の様子を知ることができると考えられます。



▲御東幸ニ付南笠村狼川御仮橋之図